

## はじめに

わが国の酪農産業は、いま、混迷のなかにある。歴史的な転換点、大きな曲がり角に立っていると考えると考えても良いであろう。

明治維新以降の近代化と同時性を持つて誕生し発展してきた日本の酪農産業は、時代とともに繰り返してその構造を調整しながら変化してきた。そうした変化の度にそれまでの経験を塗り替えていくことが必要で多くの困難が付きまとったが、それをいく度も乗り越えて現在に辿り着いた。こうした困難を克服し改革を続ける生命力の根源は、司馬遼太郎が明治という時代を「坂の上の天に輝く一朶の雲」と表現したように、酪農という新しい産業がいつまでも未来に続いていくといったような漠然とした展望であった。

しかし、明治維新から1世紀半を経過した現在のわが国酪農産業の状況は、いまや未来のカタチが全く想像できない深い閉塞感のなかにあるように感じる。その背景にあるのは何か。それは、これまでの急激な発展を支えた酪農生産の基礎構造そのものが通用しなくなったことにある。

現在の酪農生産の構造的特徴は、特に1960年代くらいからの急速な牛乳消費の拡大と一体的に形成されてきたもので、乳用牛の餌を輸入穀物に強く依存して乳用牛頭数を増やし規模の大きな酪農専門経営へ転換することによるものであった。北海道や戦後開拓地などの牧草生産を効率的に行える地域では積極的に飼料生産が行われてきたが、しかしこれも、急速な規模拡大のなかで乳用牛頭数と農地面積のバランスが崩れ、輸入の穀物や牧草への依存を強めた。多くで飼料用農地の確保も周辺の生態環境との調和も二の次となった。そうした極度に集約された生産方式の採用が生乳生産量の急拡大を可能にして増加する国内の牛乳需要を支えた。

ところが、21世紀になってからのこの四半世紀、中国などの新興国で牛乳の利用が増加し日本と同様に飼料

生産を外部化した大規模企業酪農が多く誕生すると、飼料の国際需給が一気に逼迫し価格が急騰し始め、わが国の酪農経営を強く圧迫し始めた。しかし、日本酪農は歩みの方向を変えることなく、搾乳ロボットなどの革新的な省力化技術の導入でそれまでを上回るスピードでの規模拡大と効率化・省力化を進め、さらに大規模な企業酪農が続々と生まれた。日本酪農は歯止めの効かない「過剰適応」状態にのめり込んでいった。

そうした流れがついに破綻することとなったのが、ウクライナ戦争を契機にした飼料穀物や牧草類の国際価格の急騰である。わが国酪農生産のコストは大幅に増嵩し経営収益性は極端に悪化し、国内の酪農経営はあまねく深刻な危機に陥っている。この危機を打開するために、牛乳価格が大幅に引き上げられた結果、いまやわが国における牛乳類の価格は歴史上で最も高価な水準となり、それが牛乳類消費の減退を招いている。

このままで行けば、わが国酪農産業は、高価格を維持するための消費者負担、あるいは多額の税金投入による公的支援によってしか生きながらえることができなくなるのではないか。それには自ずと限界があり、いずれ、わが国酪農産業は明らかな縮小基調に向かうであろう。私が本書を刊行しようと思った動機の一つはこうした現在のわが国酪農産業に関する危機意識にある。

この深い閉塞感から脱却するためには、わが国酪農産業の持続可能な未来への新しいカタチを見出し、それに向けたシナリオを描き、新しい行動に踏み出す必要があるが、そのためには何が必要なのか。そこで、私が着想したのが、繰り返し経験を塗り替えるという困難を乗り越えて発展してきた、わが国の酪農産業の歴史から学ぶことである。

なお、こうした着想にはこの10年程度の間の私の体験が関係している。私は、酪農産業界での仕事を2021（令和3）年6月に引退したが、その前後の数年間に、多くの地域乳業を訪問して経営者の方々とじっくりと話す機会を得た。それは、乳業の価値戦略についての取り組みやその成果と課題、あるいは学校給食牛乳の制度的な課題や今後の可能性について、地域史的な視点で捉え直すということが主な目的であった。そう

したなかで、人々がどのような苦勞をしてきたのかを掘り起こし酪農産業の発展に心身を砕いた歴史に光を当てられないかと考えることとなった。すなわち、創業の背景、その時々々の社会経済的な変化のなかでそれぞれの地域乳業がどのように対応して経営を展開し発展しまたは維持してきたのか、言い換えれば地域乳業の生命力の歴史的な背景には何があるのか、共通する戦略や経営者の資質とは何なのかについて検討することが必要であると思うようになったのである。

以上のように、本書は、現在の酪農乳業に関する深い閉塞感への危機意識と地域乳業の歴史的な生命力への関心という二つの動機が交錯してところから始まっている。

それでは、私達は歴史から何をどのように学べるのであろうか。私が思うのは次の二つである。

一つには、産業の歴史構造の特徴を確認して理解することである。そのことによって、わが国の酪農産業において、変化させることが可能なものと変化させることが不可能なもの、変化させるべきものと変化させるべきではないものを、まずは見極めるということである。たとえば、東アジアモンスーン地帯という気候的条件や標高・緯度・地形といった地理的条件は、わが国の農地利用と栽培作物の選択に決定的な影響を与えている。こうしたわが国特有の生態環境そのものを変化させることは不可能であろうが、これに抗うことが可能だという幻想のなかで行われてきた酪農生産方式の転換と「過剰適応」によって工業的生産体系による高コストの生産構造が生み出された。それが現在の危機の始まりである。一方、1960年代に誕生した大衆消費社会のなかで、生産と消費の分断が起り、農村と都市との社会的距離が決定的に遠くなった。こうした状況が、現在のフードサプライチェーンのあり方を規定し、それが農村と農業の衰退の背景にあるが、その一方で、近年、そうした関係性への揺り戻しが農村と都市の双方から起こっている。循環型の持続可能なフードシステムへの転換というフレイズが多く使われ始めたことでそれがわかる。こうした新しい変化に対応して、われわれは行動を調整し変革する必要がある。わが国酪農の未来ビジョンを構築するためには、こうした歴史の確認作

業が不可欠であろう。それを意図して記したのが本書の「第一編 日本酪農産業の近現代——牛乳を通して学ぶ歴史構造」である。

いま一つは、歴史のなかで遭遇した困難や変化にいかに対応して次の発展を作り出し生き残ってきたのか、その経験から具体的に学ぶことが可能ではないかということである。こうした視点から、私が特に注目したのが地域乳業者の歴史である。それが本書の「第二編 地域乳業の生命力——地域の事例から学ぶ産業史」にあたる。当時は一部の限られた人々ではあったが、日本人が牛乳を飲み始めたのは明治時代になってからである。この限られた日本人達の特徴は、欧米で始まった「近代」という社会に憧れ西洋文化に日本の未来を託そうとした人々で、主には高級役人、知識人、商人などの明治維新後の新しい支配階層であった。彼らの多くは東京や大阪などの主要都市に居住したので、その近傍に牛の乳を搾って牛乳を配達する「牛乳搾取業」という生業が誕生した。この牛乳搾取業を起業した人々の多くもまた、それらの新しい支配階層のなかから登場した。地域乳業の多くは、この牛乳搾取業の系譜から生まれたと言っても良い。これは、大手乳業が、大正から昭和初期における日本の産業革命期に、製糖・製菓資本の資本蓄積の過程で誕生したことは異なつた歴史を持つ。その主要な活躍の場は地方商圏で、地域性を事業の深層に持つ乳業会社ではあるが、厳しい競争のなかで多くが大手乳業社に買収されたり廃業したりして、現在は、最盛期の8割程度がすでにその歴史を閉じている。しかし、いままも生き生きとして事業を発展させ続けている地域乳業も多く、それらの地域乳業が、わが国におけるミルク利用の重要な特徴である飲用牛乳や学校給食牛乳のほぼ8割の供給を担っていることは意外と知られていない。すなわち、牛乳は、日本の近代化と同時性を持ちいわば「近代」を特徴づける食品であるわけであるから、地域乳業は「近代」という牛乳の価値」を引き継ぎ支え続けていることになる。私はこうした地域乳業社の発展と成長の歴史そして、その「生命力」のなかに、酪農産業の未来につながる持続可能なシナリオを描く重要なヒントが隠されているのではないかと考えている。

以上が、冒頭に記しておきたいと思つた本書刊行の動機であり本書の枠組みである。

なお、第一編と第二編は決して独立したものではなく、いずれも相互に関連しており補完的である。すなわち、近現代の産業的展開を大括りで振り返るとともに、それを地域史と結びつけるときに、単なる革新と成長の物語ではなく、わが国酪農産業の歴史的ダイナミクスが浮かび上がってくることに思ふ。本書の題名を『日本酪農産業史』としたのは、そのような考えからである。

本書は、わが国酪農産業の閉塞感を突破できるような直接的な答えを準備している訳でないが、お読みいただくことで、歴史の行間のなかに、これまでにない新しい視点やアイデアが見えてくると思ふ。

はじめに 1

## 第二編 日本酪農産業の近現代——牛乳を通して学ぶ歴史構造

## 序章 近代酪農産業の前史とその文化的な性格

古代から近世までの日本の乳の生産と利用 15  
 「ヒトと牛の関係性」とミルク利用の関係構造 17

## 第1章 明治期——牛乳搾取業の誕生と展開

1-1 外国人居留地から始まった乳用牛の飼養と乳利用……21  
 (1) 待ち望まれたリズレーの牧場 21  
 (2) 「搾りたて」の新鮮なミルクが求められた理由 22  
 1-2 築地牛馬会社と士族授産……23  
 (1) 明治政府が開設、築地ホテルも建設される 23  
 (2) 士族授産の一環としての牧畜振興 25  
 (3) 牧畜・酪農に高い期待をかけた明治政府 26  
 1-3 東京で広がった牛乳搾取業の状況……27

## 第2章 大正・昭和戦前期——農民的酪農の登場

2-1 都市から農村へ……38  
 ——商業的酪農の停滞と農民的酪農の発展……  
 (1) 農村部での生産開始 38  
 (2) 「市乳」と「農乳」の区別が生まれる 39  
 (3) 急速に発展する農民的酪農 40

2-2 商業的酪農が停滞した要因とは……44  
 (1) 衛生ルールの厳格化の影響 44  
 (2) 経営拡大にともなう影響 44

2-3 農民的酪農が拡大した要因とは……45  
 (1) 昭和恐慌による農村の窮乏化 46  
 (2) 大手製菓資本の練乳事業への参入 47  
 (3) 「農乳」の飲用牛乳への解禁 48

2-4 「牛乳営業取締規則」の大改定が与えた影響……50  
 (1) 新たに盛り込まれた牛乳殺菌の規定 50  
 (2) 東京府での複雑な業界事情 51  
 (3) 農乳の販売解禁が発展を生んだ 52  
 (4) 有畜農業奨励という追い風 53

2-5 戦時下における牛乳搾取業者の衰退……54  
 (1) 戦時統制下におかれた乳製品 54  
 (2) 特に都市部での衰退が顕著に 55

## 第3章 戦前戦後——有畜農業政策と酪農の展開

3-1 戦前の「有畜農業奨励規則」と農村の経済更生……57  
 (1) 農民的酪農の展開に与えた影響 57  
 (2) 農業経営への意義——副業としての家畜飼養 59  
 (3) 畜産物サプライチェーンとしての組合成立 60  
 (4) 有畜農業経営の発展に不可欠なものとは 61  
 3-2 戦後の酪農ブームと「有畜農家創設事業」……62  
 (1) 急成長した農村部の乳用牛飼養 63  
 (2) 生き残り策としての有畜農業経営 64

## 第4章 製糖・製菓資本の市場参入と大手乳業の誕生

4-1 練乳事業への本格参入へ……71  
 4-2 事例1 明治乳業の誕生……72  
 (1) 農家の副業としての「貸牛と預託」 72  
 (2) 練乳需要の冷え込みによる余乳を牛乳に 73  
 (3) 異なる市場参入で需給リスクを分散 74  
 4-3 事例2 東京の牛乳市場をめぐる競争……76  
 (1) 都市VS農村、新旧交代の競争が勃発 76  
 (2) 「赤い牛乳と白い川」の謂われ 77  
 (3) 東京菓子から明治製菓、さらに明治乳業へ 78  
 4-4 事例3 森永乳業の誕生……79  
 (1) 練乳事業から生まれた乳業会社 79  
 (2) 伊豆周辺に事業基盤をつくり拡大 80

## 第5章 戦後における酪農産業の急速な発展

5-1 農村部での生乳生産ブームと乳業事業の再開／昭和20年代……83  
 (1) 終戦直後の酪農生産の状況 83  
 (2) 戦後10年の酪農生産の状況 85  
 (3) 事業再開にともない処理施設が急増 86

5-2	体系的な産業政策としての「酪農振興政策」……………	87
	(1) 酪農生産に焦点を当てた初の制度	87
	(2) 「集約酪農地域」が選定された意味	88
	(3) 「生乳取引の公正化」が推進された意味	89
5-3	大手乳業の牛乳市場への進出／昭和30年代……………	90
	(1) 飲用牛乳の消費急増、流通の整備が急務に	90
	(2) 酪農振興と一体化した「学校給食牛乳制度」のスタート	92
	(3) 農村部での牛乳消費拡大と集団消費での地元牛乳の供給	94
	(4) 国産乳製品の過剰在庫対策と学校給食牛乳の国産化促進	95
	(5) 飲用牛乳をめぐる生乳流通と変化	96
	(6) 大手乳業の寡占化への急激な変化	97
	(7) 追い詰められる地域乳業	98
	(8) 生乳供給体制へのそれぞれの活路	99
	(9) 大手乳業が優位に立てたのはなぜか	101
	(10) 生き残りをかけローカルな商圏をつくる	102
5-4	飲用牛乳市場の競争関係／昭和40年代……………	103
	(1) 「加工原料乳不足払い制度」の制定	103
	(2) 「加工原料乳不足払い制度」の概要	104
	(3) 「加工原料乳不足払い制度」の3つの背景	105
	(4) 「加工原料乳不足払い制度」で期待された変化	107
	(5) 生乳取引の特約的關係が強化される	108

6-1	小売業の流通革命から現在に至るまで	
	量販店の台頭と牛乳市場の競争激化／昭和50年代以降……………	116
	(1) 新たな販売チャネル——スーパーマーケットの台頭	116
	(2) ワンウェイ容器への対応——ビンから紙パックへ	117
	(3) 新・農協系乳業によるシェア奪還	119
	(4) 鮮度を求める牛乳ならではの直取引	120
6-2	生乳流通に変化をもたらした主な動き／平成・令和以降……………	121
	(1) 新しい時代への対応が求められる酪農産業	121
	(2) 牛乳消費が大きく減少、大手乳業の独壇場へ	122
	(3) 小売販売チャネルの多様化、競争が激化する市場	124
	(4) 指定生乳生産者団体の広域化による、生乳取引の変化	127
	(5) 食品事故や災害を踏まえ、事業継続機能が重要に	128

終章 わが国酪農産業の時代区分とその特徴 131

第二編 地域乳業の生命力——地域の事例から学ぶ産業史

序章 牛乳流通構造の変遷

	明治時代以降のサプライチェーンの形成と変遷	142
	昭和戦前期から平成10年代以降までの傾向	144
	業態が多様化すれば、競争構造も変化する	145

第1章 地域乳業経営の歴史構造

——事例1「YUDAミルク株式会社」

1-1	YUDAミルク(旧湯田牛乳公社株式会社)の現況……………	146
1-2	創業の背景……………	147
	(1) 鉱業や林業に支えられた豊かな地域	147
	(2) 鉱山業の衰退で乳用牛を導入	149
	(3) 地域経済復活の切り札として	150
	(4) 再スタートする農村部の象徴「ミルクプラント」	151
	(5) 町民の総意でミルクプラントを存続	152
1-3	事業展開の特徴と課題……………	154
	(1) 2024年12月に民間会社へ移行	154
	(2) 生協との提携で事業基盤を確立	154
	(3) 新たな販路拡大を求めて盛岡市へ	156
	(4) 低温殺菌という「品質」で共同購入が普及	157

第2章 地域乳業経営の歴史構造

——事例2「トモエ乳業株式会社」

2-1	トモエ乳業株式会社の現況……………	172
2-2	第1創業期・前期(1956～75年ころ)……………	173
	(1) 地域で強い信頼感を得てきた創業家	173
	(2) 原料調達基盤をどのように確保したのか	175
	(3) 「トモエ(田)」の社名は企業ミッションを示す	176
	(4) 酪農家の経営参加で集乳地盤を確保	177
	(5) 牛乳の販売チャネルの開発で飛躍的な発展	179
	(6) ワンウェイ紙容器、直送販売——消費者ニーズを読む	181

2-3 第1創業・後期（1975～93年）……………183

(1) 小売業での競争が激化、その対応策とは 183

(2) 販売チャネルをスーパーマーケットに集中 184

2-4 第2期創業（1994～2012年）……………185

(1) 食品小売業の多様化に対応、事業が急拡大 185

(2) 新工場と事業の急速な伸長 186

(3) 東日本大震災から得た「強靱性」という教訓 187

2-5 第3期創業（2013年～現在）……………188

(1) 日本一の規模の第二工場で操業開始 188

(2) 経営ビジョン「3つの経営理念」を見える化 189

2-6 地域乳業における学校給食牛乳の役割……………191

(1) 学校給食牛乳があったから成長できた 191

(2) 企業モチベーションの向上と地域貢献 192

第3章

地域乳業経営の歴史構造

事例3 「新潟県農協乳業株式会社」

3-1 新潟県農協乳業株式会社の現況……………194

3-2 創業の動機と背景……………195

(1) 「成分無調整牛乳」を事業の柱に 195

(2) 加工乳への反発から農協ブランドの確立へ 196

(3) 加工乳の比率が高かった新潟県内の乳業 198

(4) 酪農家自らが乳業会社を立ち上げることの意味 200

3-3 県下の乳業会社や生乳取引の変化……………201

(1) 1985～95年に生乳取扱量が大きく増加 201

(2) 2000年代からは県内産生乳割合が半数近くに 203

3-4 県内乳業工場の減少とその背景……………204

3-5 販売チャネルの変化……………205

(1) 後発ながらも安定した売り上げを継続 205

(2) 「県内・地元産を」とのリクエストに応じる 207

3-6 製品の多様化……………209

3-7 需給調整への対応「多能工化」……………211

3-8 県内酪農の生産基盤維持が今後の課題……………212

第4章

地域乳業経営の歴史構造

事例4 「中央製乳株式会社」

4-1 中央製乳株式会社の現況……………214

4-2 創業までの経緯……………215

(1) 創業以来根づく社は「円融合」 215

(2) 薬剤師が創業、練乳会社として成立 216

(3) 愛知県酪農の基礎を作った堀脇由三郎 218

(4) 渥美郡で取り組まれた農民的酪農 219

(5) サプライチェーンの一体化が成立の鍵 223

(6) 中央製乳の成立と堀脇の尽力 223

(7) 自給飼料の生産拡大の努力が続く 226

(8) 地域との関係性から企業アイデンティティを醸成 227

4-3 事業の特徴とその背景……………228

(1) 昭和30年ころまで―練乳から牛乳への転換 228

(2) 昭和30～40年代―売り上げの7割が牛乳類 229

(3) 昭和50年代～平成7年まで―生協・学校給食など多角化 231

(4) 平成8年～現在―地域乳業の要として 232

第5章

地域乳業経営の歴史構造

事例5 「ひまわり乳業株式会社」

5-1 ひまわり乳業株式会社の現況……………239

(1) 「地域」というキーワードが最も大切 239

(2) 「地域」のもつ二つの意味 240

5-2 創業までの経緯……………241

(1) 高知酪農の嚆矢として 241

(2) 吉澤牧場からひまわり乳業の創業へ 242

(3) 県内酪農の状況 244

(4) 高知牛乳卸商業組合の設立 246

(5) 農村での生乳生産 247

5-3 事業の特徴とその背景……………248

(1) 土佐乳業株式会社の設立 248

(2) 「檀家さん」の組織を整備、安定調達へ 249

(3) 「ひまわりのプローチ」がその名の由来 250

(4) 「ひまわりさん」と親しまれるまでに 251

(5) 地域密着型の付加価値事業モデルをつくる 251

(6) 指定生乳生産者団体制度の影響 252

(7) 高知県という地理的影響 253

(8) 新小売業態スーパーマーケットへの対応 254

(9) 農協系乳業の登場と競争の激化 256

第6章

地域乳業経営の歴史構造

事例6 「永利牛乳株式会社」

6-1 永利牛乳株式会社の現況……………267

6-2 創業までの歴史的展開と背景……………268

(1) 創業前史・第1期（大正14年ころ） 268

(2) 創業前史・第2期（昭和5年ころ） 269

(3) 創業前史・第3期（昭和7～9年ころ） 270

(4) 創業期・永利牛乳の設立（昭和17年） 272

6-3 事業の特徴とその背景……………274

(1) 最初のイノベーション「10円牛乳」の販売 274

(2) 牧場の移転と建設、集乳地盤の確保 276

(3) 牛乳販売チャネルの多様化①牛乳専売店 279

(4) 牛乳販売チャネルの多様化②スーパーマーケット 280

(5) 牛乳販売チャネルの多様化③受託製造 282

(6) 牛乳販売チャネルの多様化④学校給食 283

(7) 業界に先駆け工場を近代化、HACCP認証取得 285

(8) 「関係性マーケティング」を二度目のイノベーションに 286

終章 地域乳業の成長理論へのアプローチ

おわりに 326

地域乳業の生命力とは……………294 290

ミルクサブライチエーションの特性……………294 290

(1) 生乳生産の硬直性

付録：【補遺】「酪農」と「乳業」という用語の曖昧さと歴史の変遷……………336

(2) 生乳需要の弾力性

地域乳業の成長と衰退の背景や要因……………297

(1) 「地域乳業の成長モデル」の検討 297

(2) 戦争・災害、事故・事件のショックへの対応 298

(3) 安定した原料乳基盤の獲得 302

(4) 需給調整機能の内部化と製造戦略 305

① 自社での練乳や脱脂粉乳・バター製造／② 大手乳業へ製造を委託／③ 大手乳業へ販売／④ 牛乳の安売り

(5) 牛乳市場の多様化と商品戦略 310

① ブランド強化戦略／② 販売チャネルの選択とチャネル別ブランド構築／③ 同一チャネル内のマルチブランド投入／④ 食品

小売業による価格戦略の見直しと価値開発／⑤ 価値開発によるチャネル政策の再構築とプロダクトミックス戦略

地域乳業の持続的な成長理論への「気づき」……………320

(1) 危機への対応とその経験の共有、地域社会との関係 320

(2) 強いブランドを基礎にしたプロダクトミックス 321

(3) 価値開発のための共創的協力関係 322

(4) 経営者の資質と地域複合的なコミュニティ 324

第一編 日本酪農産業の近現代——牛乳を通して学ぶ歴史構造

## 序章 近代酪農産業の前史とその文化的な性格

第一編の主要な目的は、わが国の酪農産業の歴史構造の特徴を確認して理解することである。その起点は日本の近代化にある。家畜の乳を利用する習慣がなかった日本人の食生活のなかに、牛の乳を搾りそれを処理して供給するという生業である「牛乳搾取業」が誕生し、「酪農産業」として発達し成長する時代。社会全体で見ると、西洋文明、すなわち資本主義のシステムが導入され、市民が誕生し、西洋的な生活や食の文化が徐々に浸透し始める明治以降から現在に至るまでと言って良い。したがって、本書で取り扱おうとしている酪農の歴史は、「近代産業」の史的展開と構造変化についてである。

ただ、近代資本主義の形成と同時に誕生した多くの産業がそうであるように、わが国の酪農産業もまた、近代以前の時代からの連続性という要素を無視できない。それは、わが国固有の生態環境や社会文化から生み出され蓄積されてきた多様な資源に少なからず依存し立脚しているからである。そこで、まずは、近代以前の「わが国における乳の生産や利用」の歴史についてごくおおまかに検討することから始め、徐々に、近代そして現代に接近する。

### 古代から近世までの日本の乳の生産と利用

人類が動物のミルクを食べ物として利用するようになったのは、今から約9000年前である。その地域は農耕文明が始まった中東の「肥沃な三日月地帯」の一部とその周辺で、この地域から、草食性哺乳類の家畜としての飼養とその乳利用が始まり、ユーラシア大陸の東西に、さらには南下してアフリカに伝播されていく。東アジアで最初に乳利用が始まったのは、現在のモンゴル辺りで今から3300年くらい前であったことがわかっている。その後、随分な時間を経て日本にも伝わってきたのは7世紀の中頃であった。

日本人の乳利用を示す最も古い記録として『新撰姓氏録』（815〔弘仁6〕年）がある。このなかに、「欽明天皇の時世（540〜571年）に呉の国より渡来した智総（国主照淵の孫）の子孫、善那が孝徳天皇（645〜654年）に牛乳を献じたので和薬使主やまとくすしののみという姓を賜った。」と記されている。古代における乳利用で注目されるのが「蘇」である。「蘇」は、薬としてあるいは正月などの饗宴時の食用として、また仏教行事の供物として、天皇や貴族たちによって利用されていた。平安時代中期の律令の細かな所作をまとめた法典である『延喜式』（905〔延喜5〕年より編纂開始）の巻第23『民部下』（927〔延長5〕年）には、「諸国の貢蘇は右の番次により、その年の11月までに差し出すこと。ただし出雲国は12月まで、順番に行うこと。」と記されているので、蘇を朝廷に貢ぐために、乳の生産と利用を目的とした牛の飼養が日本のかんりの地域に広がっていたことがわかる。

しかし、わが国におけるこうした牛の乳の利用は、鎌倉幕府が誕生し律令制度が弱体化すると徐々に廃れ途絶えた。鎌倉遺文・古文書編（1185〔文治元〕〜1333〔正慶2〕年）によると、「宇佐勅使 乳用牛以下の課役は悉く免除たるべき由」（1186〔文治2〕年5月金剛峯寺宛て太政官符）、「野宮公卿勅使等 内裏造作・伊勢

の橋かけ役、貢蘇、乳用牛、臨時の国命による雑役などは今後停止してよい」（1187〔文治3〕年10月後白河院庁よりの宣下）という記録があり、この頃には、牛乳や蘇の生産が中止されたことになる。なお、貢蘇に関する史料上の最後の記述があるのは、『大日本古文書』に収録された1334（建武元）年の古文書であることから、鎌倉時代の間には牛乳の利用は廃れていったと推測される。

次に、乳の生産や利用に関する記録が出てくるのは江戸時代中期になってからである。鎌倉時代の終わり頃からほぼ400年の間、牛は農耕や運搬など役畜として広く利用されるようになっていたが、乳の生産や利用についての記録はどこにも出てこない。しかし、江戸時代になると、長崎の出島を通して西洋の文化が少しずつ伝わり、オランダ人によってバターなどの乳製品も将軍に献上された。出島が設置されたのは1636（寛永13）年であるが、出島の商館に勤務していたオランダ人による『商館日記』には、江戸幕府の目付役や通詞（通訳）に牛酪（バター）や乾酪（チーズ）を贈り、これが江戸の将軍などに送られたという記録が、1640年代からしきりに出てくるので、オランダからバターなどが持ち込まれていたことがわかる。

なかでも八代将軍徳川吉宗は、バターや乳製品、塩漬け肉やハムなどを好んだようで、通詞の今村市兵衛と名村五兵衛が記した「亨保年中阿蘭陀問答」によると、1725（亨保10）年3月には長崎奉行日下部丹波守が将軍のために牛酪（バター）130文目（匁）を求めている。1726（亨保11）年11月には、幕府より牛酪の製法などに関する質問状が届いたとある。こうしたなか、吉宗は、現在の千葉県南房総市にあった嶺岡牧で乳用牛を飼う乳の生産を始める。自ら、牛酪や乾酪（チーズ）を作ろうと考えたのであろう。『視聽草』（江戸時代の幕臣・宮崎成身が作成した雑録）には、「天竺国白牛……有徳廟（徳川吉宗）始め白牛三頭を房州（安房国）嶺丘に放ち、……其の牛蕃息して六七十頭に向かう。今茲壬子、1792（寛政4）年春、岩本石州公（小納戸頭格岩本石見守正倫）は台命を奉じて、嶺丘において牛乳数石を得て、以て乾酪を製す」と記録されている\*。

このようにして、安房国の嶺岡牧に運ばれた白牛は60〜70頭まで増えて、これらの生乳から「乾乳」が作られ「白牛酪」と称して幕府に献上された。吉宗による、房州（安房国）嶺岡での白牛の飼養と乳製品の製造を、日本人による乳利用の再開と考えるなら、ほぼ400年の空白期間を経て、乳の生産と利用が復活したことになる。白牛酪の製造は、記録によれば、1793（寛政5）年から大政復古の大号令が発出された1867（慶応3）年まで、嶺岡牧や江戸城・雉子橋の東側に設置された野馬方役所邸で行われていた\*。

この嶺岡牧以外にも、江戸時代中期ごろまでの乳利用の記録として、1649（慶安2）〜51（慶安4）年に現在の青森県下北半島と岩手県北部で搾乳し、竹筒に入れて盛岡に輸送したとの記録（盛岡藩雑書、別名南部藩家老席日誌）、1700（元禄13）年に「五月牛の乳を江戸に差出さしむ」（高山御役所御用留・飛騨国大野郡史中巻に記載）という記録が残っているので、地方大名のなかでも、乳利用が密かに行われていたと思われる。こうした乳利用の起源が、古代の貢蘇に遡るのか、訪日したオランダ人などから伝播された近世以降のものなのかを断定することは難しい。しかし、鎌倉時代後期から300年以上の間の史料に記録が登場しないことから、近世の乳利用は、大航海時代の世界的な交易拡大によって、西洋から日本に改めてもたらされたと考ええる方が自然であろう。

## 「ヒトと牛の関係性」とミルク利用の関係構造

それでは、なぜ、鎌倉時代から江戸中期までのほぼ400年間、わが国において乳の生産と利用が途絶えたのだろうか。このテーマは、近代において、乳の生産と利用が産業化していく背景を考える上での基本的な問いとなるので、若干の論考を加えておく。

諸説あるが、なかでも一般に良く言われるのが仏教の影響である。675（天武4）年に最初の肉食禁止令が出され、その後も繰り返し肉食禁止令が出されたことによって、10世紀頃になると一般の人々も動物の肉を

食べないようになった。乳は動物の血液でできているとされ、肉食が忌避されたことで乳の利用も無くなったという説である。その他の説では、乳の嗜好性の問題をあげる識者もいる。日本文化史の熊倉功夫はこの問いに対して、「日本人の嗜好の問題というほかない」とし、その理由として、「大型家畜を食用に受容しなかった歴史的過程が関係」し、「根本的には乳製品の匂いと味に対する嗜好が変化しないのが大きい」としている。それ以外にも、武家社会となりそれまで乳を生産するために牛が飼われていた牧で軍馬が飼われるようになったため、武器製造に牛皮が必要とされ乳生産の余力がなくなつたため、稲作の過重労働のなかで毎日牛から搾乳する労働的な余力が無かつたためなど、さまざまな見解がある。なお、日本人の乳糖不耐を原因とする考えもあるが、その説では、それまでの約700年、乳利用が続いてきたことを説明できない<sup>\*4</sup>。

このような諸説を踏まえつつここで検討しておきたいのが人々の「ヒトと牛の関係性」とミルク利用との関係である。そのヒントになる興味深い記録がある。それは、1856（安政3）年8月〜62（文久2）年5月にかけて伊豆の下田に滞在した駐日アメリカ総領事のタウンSEND・ハリスが、下田奉行の井上信濃守に牛乳の手配を申し入れた時の奉行との間でのやり取りで、ハリスの『日本滞在記』に記録されている<sup>\*5</sup>。要約すると、ハリスが牛乳の手配を申し入れたところ、「日本では、農民にとって牛は農作業や物を運搬するために飼っているものであって、その乳は全て子牛の生育に使われているので、乳を搾って供給することはできない」。それに対してハリスが、「自分で乳を搾るので母牛を譲って欲しい」と言ったところ、「牛は農民にとってとても大切な物なので、それはできない。」という答えが返ってきたというものである。この問答からもわかることは、江戸時代後期において、牛は農村の貴重な労働力として重宝され、家畜の乳を人間が利用するという余地がなかったということである。

わが国において牛が農村で農耕に利用されるようになったのは、岩元<sup>\*6</sup>によると、中世後期以降で、最下層の農民が鉄製の鋤や鎌を持ち、犁が普及し始めてからである。牛馬の農耕利用はもちろん上層農民から始まるわけであるが、徐々に農民層の間に農耕用の牛馬飼養が広がり、これが家畜厩肥の利用に繋がり稲の生産量も増加した。そうしたことを反映してか、農書が多く書かれた近世になると、牛馬の役畜としての記録よりも厩肥使用の場面の記録が多くなる。こうして、牛馬の飼養が舍飼い中心となり、極度に施肥を重視する日本型の集約農業の基礎が近世に確立されたとしている。なお、水田耕作の中心が馬ではなく牛であったことも重要である。なぜなら、湿潤な土壌では、馬の蹄はすぐに柔らかくなり傷つきやすい。また、爪が二つある偶蹄類の牛の方が湿性の高い水田などや傾斜地の耕地の耕作に適している。水田耕作に馬が使われるようになるのは、乾田耕作法が確立された明治以降であるが、明治時代以降の牛馬の分布を見ても、水田地域に牛、畑作地域に馬が多く分布していた。

ハリスと下田奉行とのやり取りでわかる近世日本の農村の「ヒトと牛の関係性」とそこで醸成されたであろう「日本的な家畜観」は、近代以降になっても根強く残り、これがわが国における畜産業の形成過程に大きな影響を与えた。わが国における酪農業の嚆矢となったのが、長年にわたって身近に牛を飼っていた農村地帯からではなく、没落した武士階層や強い進取の意識を持っていた地主階層の若者たちのいわばベンチャー企業として都市周辺部だったのは、こうした人々が、それまでの農村における「人と牛の関係性」の呪縛の外側にあつたからであろう。

後に詳しく述べるが、明治になってすぐに、都市やその周辺部で牛乳搾取業者による商業的な乳の生産が広がる一方で、農村において徐々に乳用牛が飼われ、乳生産が始まったのは昭和になってからであった。近代日本における農業政策では、第二次世界大戦を挟んで、昭和の初期と20年代に、水田主体の農業生産方式から欧米型の家畜飼養と耕種農業を混合した農業生産方式への転換を目指す「有畜農業政策」が積極的に推進され、そのなかで、乳用牛の飼養と乳の生産が奨励された。しかし、特に戦前における農村部においては、思うように乳用牛の本格的な飼養と乳生産はなかなか進まなかつた。そこにも、乳は子牛の飲み物であつて人間が横取

りするものではないという日本独自の「家畜観」、「ヒトと牛の関係性」が背景にあると考えられる。

## 注

- \* 1 Christina Warinner 「ひきこがれる酪農文化—ユーラシアの先史時代における起源から現代の多様性まで—」特別講演会レポート、「一般社団法人Jミルク」、2018年7月。
- \* 2 松尾雄二ほか「文献にみる長崎の室町時代以降の牛乳・乳製品について」『畜産の研究』69巻6号、養賢堂、2015年、p545-550。
- \* 3 金木精一ほか編『安房酪農百年史』安房郡畜産農業協同組合、1961年、p18-20。
- \* 4 前田浩史「食文化研究の方法について」江原絢子ほか編著『近代日本の乳食文化—その経緯と定着』、中央法規出版、2019年、p386-387。
- \* 5 タウンセンド・ハリス『日本滞在記 中巻』坂田精一訳、岩波文庫、1954年、p56-57（大日本古文書「幕末外国關係文書」之十四」に所載）。
- \* 6 岩元明久「わが国近世までの牛馬飼養の歴史 中」『農業研究』第36号、日本農業研究所、2023年、p173-201。

## 第1章 明治期——牛乳搾取業の誕生と展開

### 1-1 外国人居留地から始まった乳用牛の飼養と乳利用

#### (1) 待ち望まれたリズレーの牧場

近代のわが国における乳用牛の飼養と乳の利用は、まず、開国間近の幕末において、横浜や函館などの開港された港町の外国人居留地で、欧米の貿易商などが自国から乳用牛を持ち込み牧場が開設されたことから始まったと考えて良い。

なお、序章で簡単に触れた、江戸幕府の酪農場である千葉・安房国の嶺岡牧や江戸城に設置された野馬方役所邸は、徳川幕府の崩壊とともに廃止され、そこで作られていた「白牛酪」の歴史は途絶えた。ただし、後述するが、嶺岡牧で乳用牛飼養や搾乳などに携わった「牧士」と呼ばれた人々は、その後、その技術を活かして民営事業を起こすなどして活躍したので、その点では、近世における乳用牛飼養と乳利用の歴史が完全に途絶えた訳ではなかった。

横浜の開港史や近代史の専門家である齋藤多喜夫氏<sup>\*</sup>の研究によると、初めて横浜に酪農場ができるのは1866（慶応2）年で、米国人のリチャード・リズレー・カーライルが6頭の雌牛とその子牛を連れてきて